令和６年度国重点鳥取県国民保護訓練
参 加 報 告

日　時　　令和６年１１月１２日（火）１２：３０～１５：３０
会　場　　鳥取県東部　各所
参　加　　日本赤十字社鳥取県支部国民保護対策本部要員
　　日赤鳥取県支部災害医療コーディネートチーム第１チーム
　　日赤鳥取県支部救護班第１班
　　日本赤十字社　本社防災業務課（視察）

訓練目的

緊急対処事態を想定した実動・図上訓練を実施し、国の指示に基づき実施する市の区域を越える避難の調整及び避難要領を訓練し、国、地方公共団体、指定（地方）公共機関の相互協力及び連携を強化するとともに、国民保護措置への理解の促進を図る。

訓練状況想定

1　9月上旬以降、諸外国で発生した有事に対し、政府は重要影響事態に認定して同盟国を支援
2　10月下旬、日本海沖で不審船の目撃情報が相次ぎ、また国内においてサイバー攻撃と思われる不自然な通信障害等の兆候あり
3　11月8日、鳥取市浜坂地内の海岸において無人の不審船が発見、複数名の者が上陸した痕跡あり
4　11月9日、政府は大規模テロ等対策本部を設置するとともに自衛隊の治安出動待機命令を下令
5　11月10日、政府は上陸した10数名程度の勢力が自動小銃などを携行している可能性が高いと判断し、自衛隊に治安出動を下令
6　11月12日午前8時、政府は、情報分析の結果、鳥取県鳥取市浜坂地区に当該勢力が潜伏していると断定し、緊急対処事態に認定するとともに警察及び自衛隊により封鎖した。
7　当該潜伏勢力が国家を背景とした勢力であるか現時点で特定困難
8　政府は緊急対処保護措置として潜伏地域周辺の地域を要避難地域とする避難措置の指示等を行った。

要避難地域（拡大図）

国重点国民保護訓練
日赤鳥取県支部訓練項目
（各本部と連携した）

１　支部国民保護対策本部の運営

２　災害医療CoTと救護班活動

３　外国人の安否調査

４　血液製剤の供給（施設避難に伴う広域連携）

国重点国民保護訓練　日赤鳥取県支部訓練項目（詳細版）

【訓練会場】

❶ 日本赤十字社鳥取県支部

❷ 鳥取県庁
・政府現地対策本部
・鳥取県緊急対処事態対策本部
・鳥取県保健医療福祉対策統合本部

❸ 鳥取市役所
・鳥取市緊急事態対策本部
・医療対策班（保健医療福祉調整本部）　※市型保健所

❹ 倉吉市役所 ※避難者受入れ市
・倉吉市緊急事態対策本部

❺ 鳥取市民体育館 ※避難先連絡所

❻ 鳥取県立中央病院 ※病院避難実施

❼ 鳥取空港

【訓練項目】※赤字は机上

会場❶　日赤鳥取県支部国民保護対策本部の運営
・第2配備態勢➡第3配備態勢（警戒➡対策）
・本社現地対策本部の受入れ

会場❷　鳥取県緊急対処事態対策本部への派遣
・支部災害対策本部要員

会場❷　鳥取県保健医療福祉対策統合本部への派遣
・鳥取県災害医療Co、日赤災害医療CoT

会場❷　外国人の安否調査

会場❺❻　日赤救護班の派遣
・避難先連絡所における救護所運営ミッション
・域外避難エリアにおける病院避難ミッション

会場❻❼　血液製剤の搬送

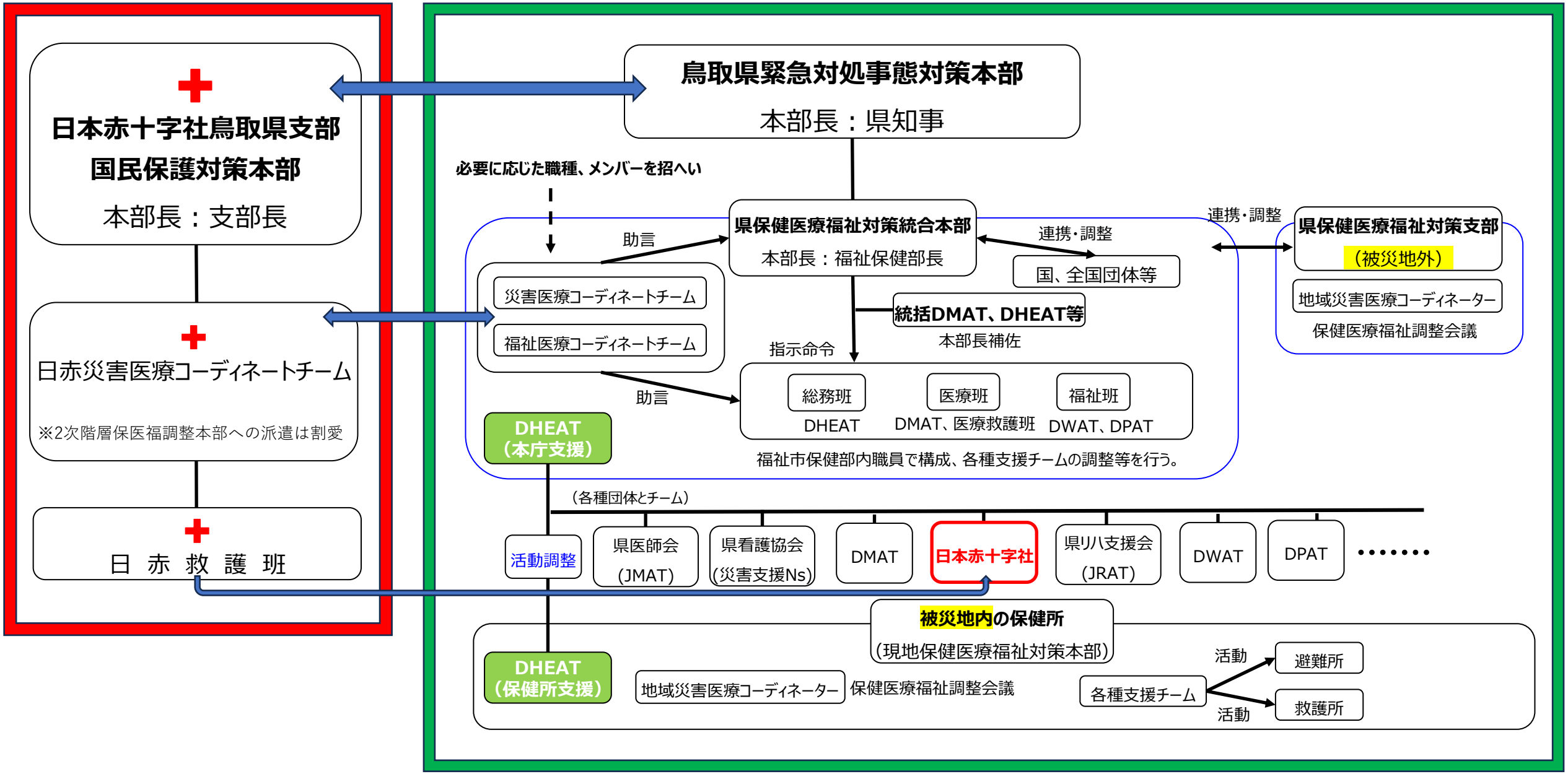
会場❷　赤十字標章の交付

会場❸❹　鳥取市・倉吉保健医療福祉調整本部への派遣
・鳥取県東部圏域災害医療Co、日赤災害医療CoT

会場❺　赤十字ボランティアの対応

会場❹❺　救援物資の搬送

日本赤十字社鳥取県支部⇔行政各本部　連携体制図



日本赤十字社鳥取県支部救護班第1班の活動

12:30　日赤鳥取県支部国民保護対策本部　到着
・日赤支部対策本部および日赤災害医療CoTと活動調整
・鳥取市民体育館避難先連絡所における救護所展開に活動決定

13:11　鳥取市民体育館避難先連絡所　到着
・連絡所本部および先着チーム（鳥取市保健師・災害支援ナース）と活動調整
・救護所設置・展開（診療２名）
・救護所運営に際し、日赤以外の既存チームで対応可能であることを日赤対策本部連絡

13:46　日赤鳥取県支部国民保護対策本部より指令
・病院避難を実施中の鳥取県立中央病院支援が追加活動に決定

14:17　鳥取県立中央病院　到着
・病院緊急対処事態対策本部と活動調整
・（医師、看護師）➠傷病者対応および入院患者搬送　・（主事、災害対策本部要員）➠病院対策本部支援

15:30　国民保護訓練終了

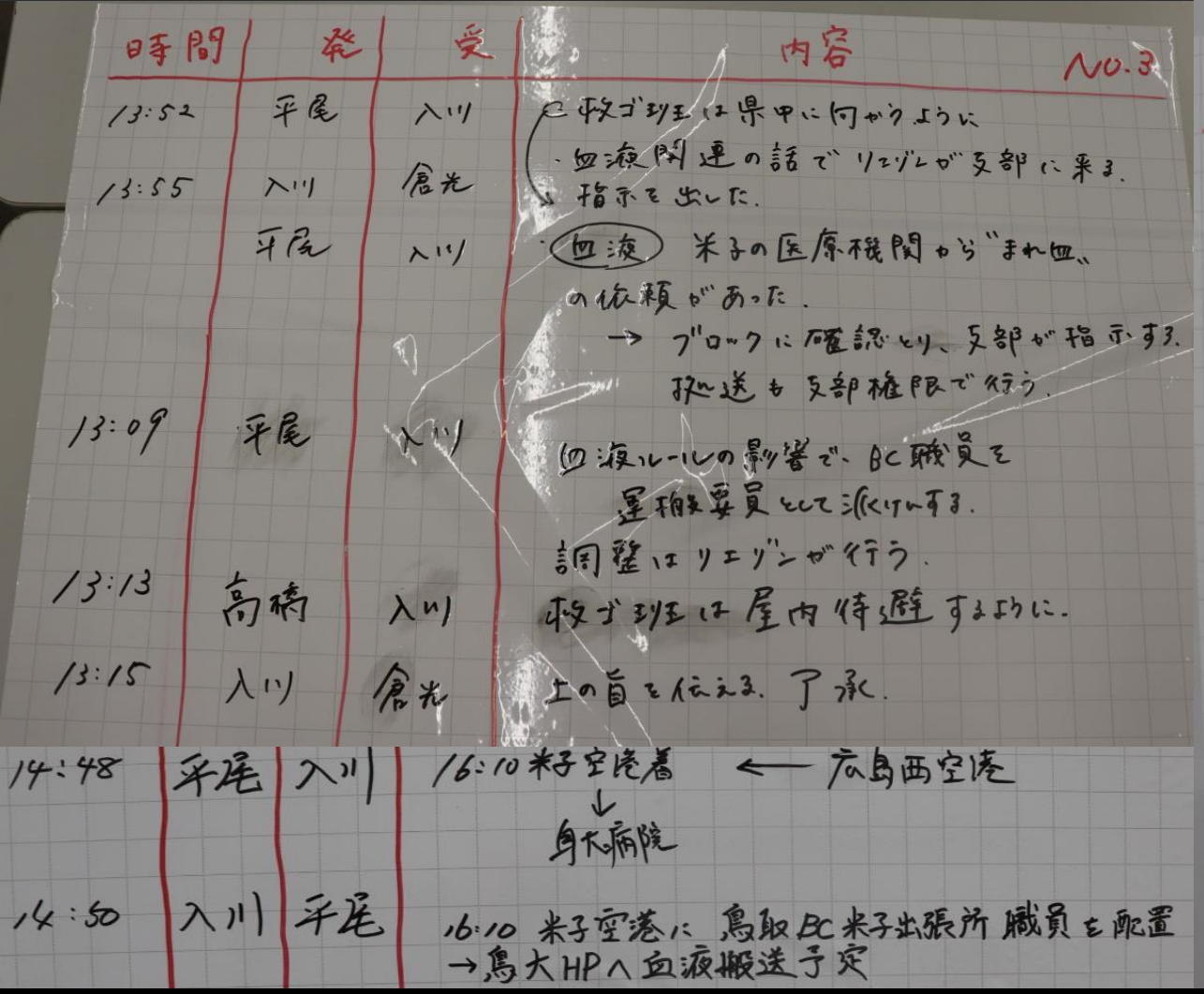
16:00　日本赤十字社鳥取県支部　帰着

16:30　日赤関係者　訓練振り返り

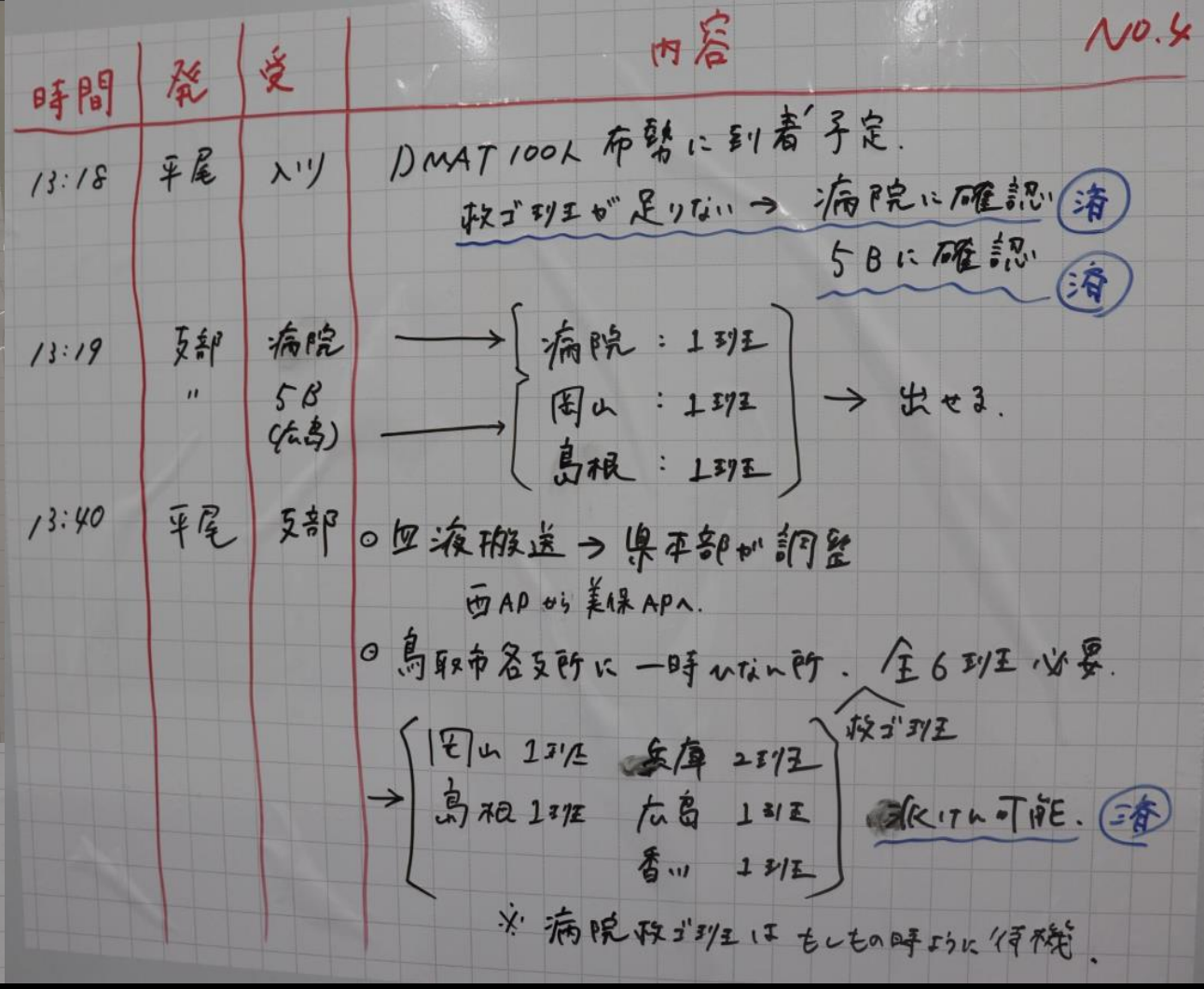
17:00　解散

日赤鳥取県支部国民保護対策本部の運用

- 本部は３名で運用（本部長代理１、救護実施部門１、活動支援部門１）
- 本部より県緊急対処事態対策本部にリエゾンを派遣（０.５　※CoTと併用）
- 本部から派遣した各チームが糸の切れた凧にならないよう指揮系統を掌握のうえ、リエゾンやCoTを通して関係機関との連携を構築した



時間	発	受	内容 No.3
13:52	平尾	入川	救護班は県中に向かうように
13:55	入川	倉光	血液関連の話でリエゾンが支部に来る。指示を出した。
	平尾	入川	血液 米子の医療機関から"まれ血"の依頼があった。→ ブロックに確認とり、支部が指示する。搬送も支部権限で行う。
13:09	平尾	入川	血液ルールの影響で、BC職員を運搬要員として派遣する。調整はリエゾンが行う。
13:13	高橋	入川	救護班は屋内待避するように。
13:15	入川	倉光	上の旨を伝える。了承。
14:48	平尾	入川	16:10 米子空港着 ← 広島西空港 ↓ 鳥大病院
14:50	入川	平尾	16:10 米子空港に鳥取BC米子出張所職員を配置 →鳥大HPへ血液搬送予定



時間	発	受	内容 No.4
13:18	平尾	入川	DMAT 100人 布勢に到着予定。救護班が足りない → 病院に確認 済 / 5Bに確認 済
13:19	支部	病院	→ 病院：1班
	〃	5B (広島)	→ 岡山：1班 / 島根：1班 → 出せる。
13:40	平尾	支部	○血液搬送 → 県本部が調整 西APから美保APへ。
			○鳥取市各支所に一時ひない所。全6班必要。
			→ 岡山 1班 / 島根 1班 / 兵庫 2班 / 広島 1班 / 香川 1班 (救護班) 派遣可能。済
			※病院救護班はもしもの時ように待機。

日赤鳥取県支部国民保護対策本部の記録

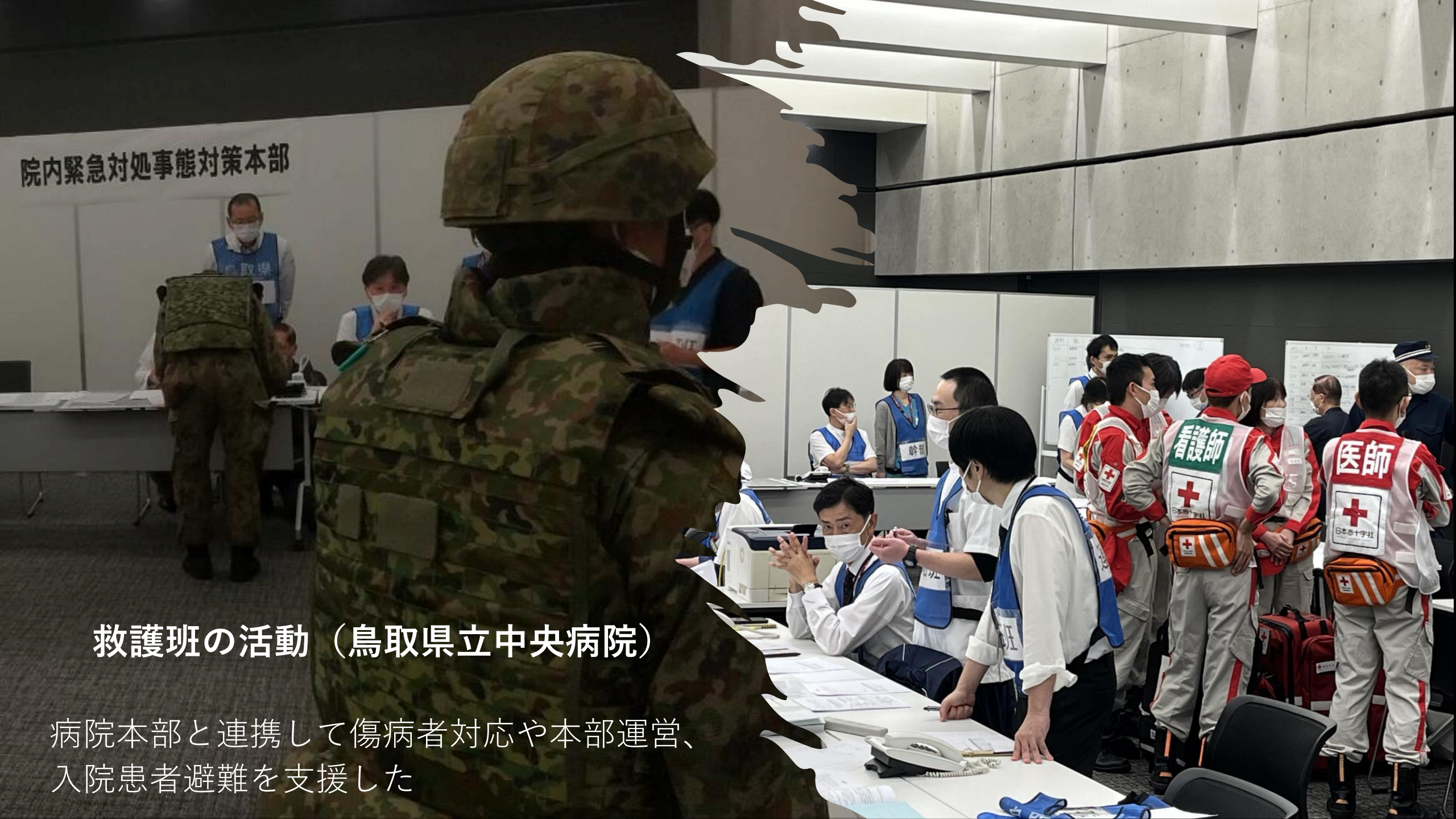
【左No.3】血液製剤の広域搬送調整のうえ、救護班血液供給要員を派遣する記録
【13:13】緊急事態発生のため救護班に安全管理指示を行う記録
【右No.4】他機関の動向や日赤救護班の広域派遣調整を行う記録

日赤災害医療CoTの活動

- 県保健医療福祉統合本部で県福祉保健部（DMAT,DHEAT,DPAT,DWAT）や県医師会（JMAT）、県看護協会（災害支援Ns）と連携して、避難指示エリアの保健医療福祉施設の施設避難や活動・参集チームの指揮、県対策本部や各保健所との連携が課せられた。
- CoTは県と共に避難施設の籠城支援提案や血液製剤の広域搬送を政府現地本部と調整した。

救護班の活動（鳥取市民体育館避難先連絡所）

鳥取市保健所保健師２名、災害支援ナース１名と協働し
救護所を運営（傷病者２名を診療）



救護班の活動（鳥取県立中央病院）

病院本部と連携して傷病者対応や本部運営、
入院患者避難を支援した

各所のようす

【 右 】県立中央病院の病院避難を実施するUH-60-J（航空自衛隊小松基地所属）
【 中 】オンライン共有された各現場の映像や避難者把握システム、EMIS等
【 左 】県立中央病院で県災害医療Coと連携する救護班医師

訓練と併せて同日開催した
日本赤十字社鳥取県支部災害対策本部研修会

1 目 的

日本赤十字社の各災害救護計画および体制について理解する。

2 主 催

日本赤十字社鳥取県支部

3 日 時

令和6年11月12日(火)9時00分～11時10分

4 会 場

日本赤十字社鳥取県支部 奉仕団室

5 講 師

(1)日本赤十字社防災業務課 課 長 中村 秀徳

(2)日本赤十字社防災業務課 計画係長 河端 哲郎

6 内 容

別紙「プログラム」のとおり

時 間	プログラム	担 当
9:00 ～ 9:30 (30 分)	研修1 「日本赤十字社国民保護業務計画について(仮題)」	本 社
9:30 ～ 10:00 (30 分)	研修2 「日本赤十字社原子力災害医療の体制について(仮題)」	本 社
10:00 ～ 10:10	休 憩	
10:10 ～ 10:40 (30 分)	研修3 「日本赤十字社南海トラフ地震対応計画について(仮題)」	本 社
10:40 ～ 11:10 (30 分)	研修4 「南海トラフ地震に対する鳥取県支部の取組み」	支 部

7 参加者

(1)日本赤十字社鳥取県支部災害対策本部要員(原子力災害医療 Adv を除く)

(2)日本赤十字社鳥取県支部管下施設に所属する災害救護担当者

No	所 属	職 名	氏 名
1	鳥取県	医療政策課 課長補佐	原 耕 平
2		医療政策課 主事	吉田 あきな
3	日本赤十字社 鳥取県支部	事務局長	小林 敬典
4		事業推進課長補佐(兼)ボランティア・青少年係長	倉 光 弘
5		総務課 主任	入川 由記
6		総務課 主事	佐田久 史果
7		事業推進課 救護・健康安全係長	平 尾 淡
8	鳥取赤十字 病院	外科部長(兼)救急科部長	山 代 豊
9		リハビリテーション課 理学療法士主任	岡 本 英典
10		救急部兼総務課 主事	中 里 圭汰
11	鳥取県赤十字 血液センター	総務課 管理係長	髙 橋 克弥

本社防災業務課を講師に迎え、鳥取県職員にも参加いただき、普段取り扱うことが少ない国民保護業務や原子力災害業務、大規模地震対応について、議論を深めました。